

「五月の風の中で」

主任司祭 吉池 好高

新緑の中を五月の風が吹き抜けています。五月はちょっぴり淋しく、ちょっぴり不安で、でも、お先真っ暗らというのではなく、満ちてくる期待に包まれる季節です。五月の風はそんな季節の風です。

昇天される主を、天を仰いで見送った弟子たちも、そんな風の中にたたずんでいたことでしょう。いいえ、わたしたちの心を吹き抜けるこの五月の風は、きっと、あのオリベトの山の頂から吹き渡ってくるのです。

復活された主のお姿は、その昇天によって、もはや弟子たちの目には見えなくなります。けれどもそれは、別離であって別離ではありません。イエスの十字架の死と復活のドラマを真に体験した者たちにとって、償うことの出来ない、埋め合わせることの出来ない別離というものはありません。弟子たちのもとを離れ、御父のもとに行かれる主は断言されます。「見よ、わたしは世の終わりまであなた方とともにいる」。このとき以来、わたしたちの全ての別れのことは、このみことばのエコーとなったのです。五月の風はそのエコーをも運んでくれるようです。

五月の風は、聖霊降臨の日に弟子たちに臨んだ圧倒的な聖霊の息吹の予兆のようです。主の約束を信じ、聖母とともに祈る弟子たちは、そんな五月の風の中にいます。集まって祈るその部屋は、もうあのときのように内側から鍵をかける必要がありません。開け放たれた窓からは、外からの五月の風が、解き放たれた弟子たちの心の扉に、今や天の御父の右に座しておられる主の息吹としての風が、吹き抜けてゆきます。

私たちを包む五月の風には、マグダラのマリアがかき抱こうとした復活の主の残り香が、感じられるようです。その風の中には、ともに祈る聖母の香りも、また漂っています。